

油濁対応訓練の重要性について (訓練と実際の事故対応とのギャップを踏まえて)

Archie F. Smith
Director and Chief Executive
Oil Spill Response Limited

訓練の重要性

どのような緊急事態においても、対応する側の能力と知識が、対応が効果を発揮するかどうかの鍵を握っている。有効な対応計画は、対応者に間違いなく指針を提供し、必要な道具立ての利用を容易にする。従って、対応者はこうした計画に精通し、計画を試行し利用し発展させるための機会を持たなければならない。また計画は緊急事態が発生する前に訓練として実行されなければならない。「間違いを犯す」ことは強力な学習手段のひとつであり、我々はそうやって「素晴らしい」手段を発見した。だが、実際の事故においてそのような間違いを犯すことは望ましくない。

我々は専門家として訓練の重要性を理解しており、体系的なプログラムを開発して有意義な訓練を展開するために、多大な努力を重ねている。しかし、油濁対応訓練の必要条件に関する理解や、訓練の頻度と現実的な訓練の必要性については、いまだ世界に大きな違いが存在する。OPRC 条約（油汚染に対する準備、対応及び協力に関する条約）が導入され、条約締約国は訓練プログラムを公表することが条件として求められるようになり、状況は変化しつつある。今まさに英国で、これが実施されようとしている。この要件に加えて、米国では 1990 年油濁法によって「PREP」プログラムと呼ばれる対応訓練計画の確立が求められている。

IPIECA（国際石油産業環境保全協会）と IMO（国際海事機関）はこの問題の重要性を認識し、「Guide to Oil Spill Exercise Planning（油濁訓練計画ガイド）」と題する優れた共同刊行物のなかで、訓練を実行する目的は計画、資機材そして対応チームの能力を試すことであると述べている。さらに、計画改善に向けた提言につながり、また資源の利用あるいは要因の訓練につながるような評価と再検討が行われなければ、訓練は完了しないとも指摘している。同書に述べられている「指導方針」は、油濁訓練に傾けられた努力を最大限に活かす方法を、実例をあげて解説している。

指導方針

- ・ 上層部からトップ・ダウン形式で確実に訓練活動を支援すること。
- ・ 明瞭かつ現実的で数値評価の立てられる目標を設定すること。
- ・ 訓練の狙いは改善することであり、良い印象を与えることではない。

- ・ 当初は簡単な訓練を何度も繰り返すことが改善を加速させる。
- ・ 要員が経験を積み技能を修得するまでは複雑な訓練に取り組まないこと。
- ・ 活動、場所および参加者が多くなればなるほど訓練が必要以上に複雑になる。
- ・ 訓練の評価で成功を納めることは、訓練を成功させるのと同様に重要である。
- ・ 訓練の計画、実行ともに成功を納めることは重要な成果である。

優れた訓練とはどのようなものか？

訓練には様々な形態があり、様々な理由で利用され、用語も多岐にわたる。下記の表は IMO と IPIECA が支持する形式と、PREP プログラムに含まれる形式を示している。

表 1：一般的訓練の形式の比較

IPIECA/IMO	PREP	
	内部 (業界)	外部 (行政)
<ul style="list-style-type: none"> ・ 通告 ・ 機材の配備・展開 ・ 机上訓練 (テーブルトップ) ・ 事故管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 資格のある個人への 通告 ・ 機材の配備・展開 ・ 緊急時の手順 ・ 油濁管理チーム机上 訓練 (テーブルトッ プ) 	<ul style="list-style-type: none"> (地域) ・ 通告 (地域) ・ 機材の配備 (地域) ・ 油濁管理チーム机上訓 練 (テーブルトップ) (地域) ・ 地域訓練

多くの種類の油濁訓練を実行することが重要な理由は、計画のさまざまな面が個別に訓練でき、計画全体の目的と範囲について理解が促進されるからである。しかし、訓練を有効なものにするためには、定められた目標が達成され、全ての関係者が試されなければならない。これらの関係者には実際に事故が発生した際に関わりを持つ全ての人々が含まれていなければならない。従って、事故の際に政府やその他の関係団体からの情報が必要な場合には、政府や、これら団体の代表抜きで大規模な訓練を実施しても意味がない。さまざまな関係者と定期的に訓練を行うことは、実際の事故で極めて貴重となる関係を樹立するのに大いに役立ち、その点で付加価値がある。

訓練をできる限り実地に近づけたいとする気持ちに駆られることがある。しかし、プレッシャーをかけすぎ、参加者の意欲をそいで、目標を見失うことのないように注意することが必要だ。対応グループが(現実の事故においても、訓練においても)組織的および対外的

な課題を繰り返し与えられてやる気を喪失してしまう可能性があることは理解しておくべきであり、計画の基盤を構築しようとするときに、こうしたことを訓練で行うのはまったく目的にそぐわない。むしろ、計画のそうした側面をテストする必要性が生じるまで待つ、そこでシナリオを導入すべきである。

従って、定期的を実施することによって有効性をもたらすような方法こそが望ましい訓練である。そのような有効性とは次の通りである：

- ・ チームとして協力して動き、参加者に通常は要求されないような複雑で判断の難しい決定を下すこと。
- ・ 計画と手順を実践して試すこと。
- ・ 官・民の信頼を醸成させること。
- ・ 個人の技能を育成すること。
- ・ 通常は一緒に行動しない人たちにも、お互いの目標を理解し、相互信頼を作り上げることを可能にすること。

我々はこれまで常に、訓練に伴って適切な評価を行ってきており、そうした評価こそが緊急事態または危機への対応能力を常に向上させるためには不可欠であることを知らねばなりません。即ち、優れた訓練では評価はそのプログラムと一体として考えなければなりません。それ以外の重要な要素としては、現実的な目標を設定すること、適切な計画を開発すること、十分に考慮されたシナリオを作り関係者全員に連絡すること、適切に管理されたプログラムを作成することがあげられる。評価段階は事前に計画する必要がある。それによって参加者並びにオブザーバーが訓練に没頭している間にも、参加者と観察者からデータを収集しフィードバックすることが可能になる。つまり“自己完結型”評価プログラムである。その後で詳細な分析が行われ、勧告を含んだ詳細な報告書が作成されることが望ましい。これについても IMO/IPIECA の「Guide to Oil Spill Exercise Planning(油濁訓練計画ガイド)」に明瞭に示されている。

訓練で現実が再現できるか？

これまでに考察した通り、明快な目標を設定し、共同作業によって計画の修正に結びつくような提案を行うことによって、訓練を有意義にすることができる。そうすることによって我々自身が勉強し、他の人たちに教えることができる。様々な数多くの方法を、予告無しに開始することによって、訓練を現実的なものにすることが可能である。OSRL に所属する我々が参画してきた演習と訓練には、人員と機材を搭載した Hercules（ハーキュリーズ）航空機を長距離飛行させること、商船や軍艦、また多くの政府機関との協力等が含まれている。しかし、最も現実的なシナリオが予想もしなかったところから発生することもある。例えば、訓練本部の外で油濁が発生したとの想定で学生を募って訓練を行っていた時に、これを本物の事件と思った人たちが本気で参加してきた。地域のマスコミが訓練活動を見て本当の油濁と思い違いをしたのにも困惑した。訓練参加者を実際の事故と同様の

疲弊状態に追い込むことも可能だが、訓練はあくまで訓練であり、そこまで現実と近づけるようなことは避けるべきである。

実際に緊急事態が発生した場合の優先順位は様々であり、訓練の時に我々がテストしようと望む順位とは異なることが多い。細かい重要ポイントを抑えることによって全体的な対応を改善することが、多くの訓練が持つ価値である。大きな課題は政府対応のテストに存在することも心得ておくべきである。我々の業界は教育と訓練のために十分な資金を備えているが、政府は必ずしもその通りではなく、全体的な結果をより良いものにするために政府と協力する役割を担っている。実際に油濁が起きると、多くの省庁間で優先順位の差が生じるが、我々はそれに巻き込まれてはならない。むしろ我々はそのような優先順位の違いを承知のうえで、我々と協力する部署が主たる対応目標を達成できるよう援助すべきである。

将来に何を期待すべきか

将来を占うのは不確かな場合が多く、予測を立てた人が赤面する結果になる場合がしばしばある。しかし、この論文の執筆者としては、予測のうちいくつかは必ず直面する可能性の高いものがあり、我々はそれらへの準備を怠らず、むしろそれらを有利に利用することを心がけるべきである。

油濁訓練と演習に関してさらに強い法的義務が課せられる可能性が高いと思います。このことは我々が実施しなければならない訓練の形式に対して従来よりも他の政府機関からの干渉が増し、訓練の頻度も増すことを意味する。同時に訓練を視察する人の数が増え、これらの政府機関からの参加の必要性が増すことも予想される。これ自体は悪いことではないが、ただ、義務づけられる訓練の種類と頻度によっては、事実上目標を達成できないにも関わらず金銭的な負担だけが増える可能性もある。さらに深刻な結果につながりかねないのが合格基準が押し付けられることである。こうした基準は政府の監督官庁による目標達成評価に基づくことになるのは必至であるが、業界の評価とは異なったものになることはほぼ間違いない。

我々の油濁訓練における変化で歓迎すべきことは、情報技術（IT）の利用であろう。ITの利用はモデル作成やリアルタイムの対応計画作成にあたって現実性を高めるだけでなく、記録や評価、また関係者間でのコミュニケーションの改善にも役立つ。ITの利用は、デジタル電話の使用やコンピュータとデジタル写真のリンクなどで既に始まっている。弱点とする分野を再現したり、評価段階での訓練中または直後に他の選択肢をテストするために、ITの利用が進展することは非常に望ましいところである。

結論

我々が行っていることを改善するためだけでなく他の部門との関係を強化するためにも、油濁対応訓練は重要かつ価値のある手段である。特に政府省庁や他の主要機関にとって重要である。

シナリオによっては油濁訓練の現実性は魅力的であり重要であるが、最も大切なことは目標を達成することである。現実性を過度に追求したり、参加者に過度な圧力を与えると目標達成はいとも簡単に果たせなくなる。

我々は訓練と実際とを同じと考えることはできないし、してはならない。我々がより多くを習得できるのは、計画と対応者の育成に関わる重要な問題に焦点をあわせた、体系化された訓練プログラムを通じてであり、実際に事故が発生し、我々に関わりのない理由によって目的が奪われてしまうような状況からではない。

下記に謝辞を表す：

1. IMO/IPIECA 報告書シリーズ第 2 巻、「Guide to Oil Spill Exercise Planning (油濁訓練計画ガイド)」
2. David E. Neilson 著「The Advantages, Costs and Pitfalls of International Drills and Exercises (国際訓練と演習の利点、コストおよび問題点)」、Society of Petroleum Engineers Conference、1998 年カラカス。